１、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　　　　　　　　　　　永澤哲

１　全体計画（2015~2019）

　4年間の研究期間中、チベットをはじめとするアジア、およびそれ以外の地域の霊的伝統において伝承されてきた身心変容技法について、それを支えてきた環境・文化・社会的コンテクストはいかなるものだったのか、また現代における発展、変容、変質を明らかにすることを目指す。

２、2016年度研究計画

　　2016年度は、以下の二点を中心に研究を行う。

1. 倍音声明瞑想の科学的研究（音響学）

高次倍音発生のメカニズムについて音響学の実験を継続するとともに、さらなる理論的究明を行う。また、癒しの臨床における適用の可能性、禁忌について考察する。

1. アジアの仏教、聖地、医学の研究

アジアの仏教、聖地、医学およびその現代的展開について、おもに比較の観点から研究する。

２、鎌田科研：「身心変容技法と霊的暴力－宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」についての、活動計画（２０１６年度）　鶴岡賀雄

（１）昨年度は、十六世紀スペインの神秘家十字架のヨハネの「魂の暗夜」についての論考を作りましたが、不十分なままでした。本年度は、これを補いつつ、完成させます。

（２）昨年度から予定していた、十七世紀フランスのイエズス会士ジャン=ジョゼフ・スュランの有名な悪魔体験について、再検討したいと思っています。スュランについては、二十年以上前に読んで、論文を書いたことがありますが、その後フランスでの研究が大きく進み、新たな校訂版が多く刊行されていますし研究書も増えました。それらを踏まえて、キリスト教の伝統の中で「悪魔・悪霊」とは何なのか、考えを深めたいです。ちなみにスュランは上記の十字架のヨハネの教説から大きな影響を受けています。

（３）「負の感情」、というある意味で個人的なレベルの考察から、「霊的暴力」という、より一般的な問題に考えを進めたいのですが、それは、宗教の領域では、悪魔といった神話的形象を用いて思考されてきたと思われます。リクールの古い研究が参考になります。私的勉強会で少しずつ読んでいるカタリ派のテクストを足場に、神話的形象が形而上学的原理としてとらえなおされていく経緯を探りたいです。

　これは、抽象的に言えば「悪の還元不可能性」といったところに行き着くと思われますが、この抽象的なレベルから現代の具体的な問題になんとかたどり着きたい、というのが最終目標です。実現可能性は差し置いても、目標を掲げておくことだけでも意味があると思って書きました。

３、オーウェンの知られざる霊的側面に光を当てる　　津城寛文（筑波大学）

　ロバート・オーウェンについて、平均的な読書人の知識は、社会改革者、空想的社会主義者にして、晩年はスピリチュアリズムへの回心者、といったところである（ウィキペディア、日本語、英語）。海外での研究状況については、まったく見通しがきかないが、日本の学術的なオーウェン研究については、五島茂が、文献その他の資料整理、『自伝』その他の紹介翻訳、そして基礎研究をリードしてきており、私見では、そのやや偏った作業によって、一面的なオーウェン像が構築されているように思われる。

　「偏った」というのは、初期の社会改革思想から「晩年のスピリチュアリズムへの回心」が、全面的に否定的なものと捉えられていることと、それ以前に、翻訳紹介の段階で、作品の偏った取捨選択があり、さらには独立した作品において、大幅な削除があること、である。

　一人の思想家には、「回心」とまでいかなくとも、一般論としても、多面的な思想があり、研究者（読み手）の立場、視点から、それぞれの価値評価をするのは、当然のことである。しかしそうした多面的な文書を、翻訳紹介作業の段階から、一定の意図で取捨選択、削除編集するのは、基礎作業として、説得性、公平性に欠けるところがある。論争のあるテーマについて、批判、評価する場合、何を否定し何を評価しているのか、まずは判断材料を偏りなく示し、主張に有利な材料も不利な材料も、広く提供する必要があるだろう。とくに、重要な思想家の場合、重要度に応じて、文書が、草稿やメモを含め、網羅的に収集されるのが通常である。その意味で、英文のオーウェン著作集四巻は、かなり網羅的である。

　最後の運動機関紙、一八五六年から死去する五八年までの「至福千年期新報Millennial Gazette」について、翻訳紹介者の五島が、「心霊主義的傾向が濃い。彼がいかに本誌に執着してゐるかは自叙伝の序の対話でも瞭らかだ」と述べているとおり、自叙伝と心霊主義を切り放そうとするのは、無理がある。しかも、オーウェンの社会的ビジョンは、初期から晩年まで、驚くほど一貫しており、断固としてシンプルである。一九世紀の後半、「多くの社会主義者がスピリチュアリストだった」のは間違いなく、この観察を無視しては、社会主義の要点は見失われるだろう。私はオーウェンの一貫性ある自己理解に沿って、オーウェンを理解したいと思う。

　同時代者、弟子たちからも批判されて、オーウェンの「心霊主義的傾向」を示す「自叙伝の対話」その他の未邦訳部分を抄訳し、議論のための材料を提供したい。

４、鎌田東二

①　オウム真理教事件の究明とオウム真理教における身心変容技法と霊的暴力の問題

1. 法輪功事件の究明
2. 洞窟体験と身心変容技法の関係の追求、また世界の洞窟聖地のフィールドワーク
3. 世阿弥の「申楽」研究と談山能の見学と研究
4. 修験道研究
5. 「魔」あるいは「魔境」あるいは「悪魔」の研究
6. グノーシス主義研究

５、2016年4月15日　身心変容技法と霊的暴力　2016年度研究計画　倉島哲

基本的には、『身心変容技法研究５』で考察したマンチェスターの太極拳教室のフィールドワークを継続したい。今年度は、特に次の点に着目する。

・高齢の中国系住民のための福祉政策の一環としての無料の太極拳クラスが３クラス開催されているが、マンチェスター市による援助は昨年度で打ち切られてしまった。今後は有料のクラスになる予定である。

・通常の一回５０分で６ポンドのクラスには、高齢の中国系住民はほとんど参加していない。そのため、高齢者福祉の目的で料金を３ポンド、あるいは２ポンドに割り引いたとしても、どれほどの参加者が見込めるかは未知数である。

・マンチェスター市と太極拳教室の間を取り持つのは、Chinese Health Information Centreという福祉団体である。この団体の代表者は、英語を話せないために各種のコミュニティ活動に参加できず孤立している中国系高齢者にとって、太極拳はもっとも文化的に適切(culturally relevant)な運動であると述べている。

・しかし、当の中国系高齢者の間では、太極拳は身体に良いことはわかっているが、お金を払ってまでするものではないという観念が根強いのではないか。

・武術として中国内陸で発祥した太極拳は、現代イギリスにおいて保健活動として再創造されている。このプロセスは、中国人の太極拳をイギリス人が受容する、という図式で理解されがちであるが、イギリス在住の中国人の存在を考慮する必要がある。中国社会における太極拳の位置づけ（無料のコミュニティ活動）と、イギリス社会のなかでの位置づけ（有料のクラス）の齟齬をどのように解消しているかを考える。

・太極拳とはこういうものだ、という文化的に共有された観念が高齢者の太極拳クラスへの参加を阻んでおり、それが結果的にQOLの低下につながるならば、この観念はある種の霊的暴力であるといえるかもしれない。中国在住のさいは問題のなかったこの観念が、イギリスでは問題になるならば、霊的暴力は社会文化的コンテクストに依存しているのだろうか。

６、研究計画書　林　紀行（大阪大学大学院医学系研究科統合医療学寄附講座）

全体計画：

　昨年度は身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、統合医療の観点から考察するとともに治療抵抗性慢性疼痛に対する統合医療的アプローチという臨床試験を計画した。

　今年はこの臨床試験を実施しそれを報告するとともに、ホスピスにおける緩和ケアに対して身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力を考察してみたい。

　緩和ケアは痛みや不快感に対する身体的ケア、感情的な精神的ケア、人間関係などの社会的ケア、それらの範疇に収まらない本人特有の苦しみに対するスピリチュアルケアにわけられる。これまで日本の一般医療において身体的ケア、精神的ケア、社会的ケアについては一般医療の範疇で取り扱われていたがスピリチュアルケアについて扱われることは少なかった。これは日本人のスピリチュアルケアへの注目の低さもさることながら、歴史的背景から宗教的とも捉えられるものを公的な場で扱うことの困難さも関係している。

　近年GRACEプログラムが日本でも開催され、医療従事者の注目を集めている（ <http://bwdj.org/> ）。マインドフルネスによる終末期ケアとも訳されるこのプログラムは仏教哲学を根本に設計されているが仏教徒でないものも扱えるように工夫されている。このプログラムは医療従事者の燃え尽き症候群の防止にも繋がるとされており、スピリチュアルの理解にも繋がりうる。

　今回GRACEプログラムに参加し、それを実際にホスピス業務に適応する臨床試験を計画する。それを元に臨床試験を行い日本におけるスピリチュアルケアの構築を図る。

　２０１６年次計画：

　「治療抵抗性慢性疼痛に対する統合医療の実施可能性に関する検討」と題して大阪大学医学部附属病院にて臨床試験を施行、結果をまとめる。

　「GRACEプログラムに基づく介入によるホスピスにおける燃え尽き症候群防止とスピリチュアルケアの構築」と題してホスピス病棟にて臨床試験を施行、結果をまとめる。

７、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　東京大学医学部付属病院　循環器内科　稲葉俊郎

１　全体計画（2015~2019）

　現代医療を見渡すと、現在主流である自然科学をベースとした西洋医学だけでは不十分であることは認識されている。ただ、医療現場において様々な伝統医療や補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine：CAM）、統合医療は実践されていないのが現状である。その理由は様々挙げられるが、伝統医療や補完代替医療の正の側面も負の側面も正しく認識されていないことが原因の一つと考えられる。心身変容の技術は正しい方向に使用すれば未来の医療における可能性を持つが、誤った方向に使用すると霊的暴力となり危険性へと変化する。身心変容技法を多角的に捉えることで、未来の医療に適切に応用していくことを目的とする。

２、2016年度研究計画

1. 世界の医療制度を調べながら、様々な身心技法が未来の医療として調和できる社会のモデルケースを考察し、提案する．
2. 日本最古の医書「医心方」をはじめとして、医療の歴史を調べる。その中で身心変容技法の正の側面、負の側面がどのように扱われたかを検証しながら、未来の医療にどのように適応されていくかのモデルケースを考察し、提案する．

８、研究計画書　金香淑（目白大学前准教授・京都大学こころの未来研究センター連携研究員）

2016年度研究計画

韓国の巫俗における「治病クッ」を取り上げ、治病の過程で見られる身心変容技法と虐待や暴力の問題について考察する。

巫俗では、病を①不浄なるものや煞、神・雑鬼が人間の身心に入り込んで引き起こされる、②人間の不謹慎な行為により神や祖上の怒りを買い、その罰として病気になる、と考える。したがって、病の原因となった存在を患者の身体から除去するか、神や祖上の怒気をなだめる必要があり、神たちの機嫌を取ったり、ご馳走でもてなしたりするために「治病クッ」を行う。しかしその過程で、治病行為と称して棒で身体を叩いたり、刃物で刺したりする暴力も少なくなく、けがを負ったり、死に至る事件が発生することもある。また、治病クッを名目に高額な費用をだまし取ったりすることも珍しくない。

このような治病クッの過程で表れる身心変容技法と、負の側面である虐待や暴力問題について、実地調査等を行い具体的に調査・分析する。それを通じて、韓国の伝統的宗教である巫俗が現代韓国における社会的病理をどのように解決し、癒すのかを考察する。

９、身心変容と霊的暴力　２０１６年度研究計画　島薗　進

1. 国家神道が日本の住民に及ぼして来た「規律訓練」の歴史的変遷について考察する。とりわけ、軍隊が人びとの身心変容をどのように押し進めてきたかについて検討していく。
2. 軍隊における儀礼的要素とその歴史、その文化的影響源、そしてその効果について考察する。とくにそれらが暴力的傾向を帯びるようになったのはどうしてかについて考察する。
3. 天皇のためにいのちを捧げるという考え方が、どのように取り込まれ、成長し、やがて猛威をふるうようになっていくか。靖国神社や特攻の歴史を通して考察する。
4. 日清、日露戦争からアジア・太平洋戦争に至る過程で、マスコミが国家神道的な身心統御がどのように強化し、霊的暴力の傾向を広めるのに至貢献したかついて考察する。
5. 戦後の文化のなかに、戦前の軍隊で培われた霊的暴力の要素が、どのように引き継がれているか、またどのように批判的に扱われて来たかについて考察する。

１０、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　野村理朗（京都大学）

1. 全体計画（研究背景）

個人・集団間葛藤の予防・解決に寄与することを大きな目標とし、心理学実験・調査法を軸として、脳画像化・賦活法（fMRI・tDCS）により、注意集中（瞑想等）や自他の認識について、遺伝子多型・修飾による個人差、および社会・自然環境（文化・風土等）との関わりをリンクさせつつ研究してきた。

2016年度は主には以下の三点について検討する。

1. 研究計画

（１）ネガティブな感情、あるいはポジティブな感情（他者への思いやり（compassion）等）が感情の制御、個人の適応、それらを支える脳内機構およびバイオマーカ（ストレスホルモン、遺伝子発現等）との関連の検討

（２）瞑想方法の差異が、心身相関および続く感情処理に及ぼす影響の検討

（３）畏敬の念が、他者への行動（攻撃行動、利他的行動等）に及ぼす影響、およびその関係を調整する心理・生物・社会的要因の検討

１１、古谷寛治「分子生物学から学ぶフィードバック制御による身心変容」

私たちの細胞は複製と分裂のサイクルを繰り返すことで増殖します。ただ、常に円滑にこれが行われるわけではなく、放射線や紫外線によりゲノムDNAが傷付いた細胞は、一旦そのサイクルを停止させ、傷の回復を待つ。すなわち細胞にはゲノム上の傷を検出し、「細胞分裂サイクル停止シグナル」を発動する仕組みが備わっている。

ただ、細胞にとって最も重要なのは増殖することであり、一旦分裂サイクルを停止させた細胞は細胞分裂をできる限り早く回復しなければならない。また分裂停止をしなくてもいい程度の傷であればやり過ごすことで円滑に細胞分裂サイクルをまわすことを優先させることもわかっている。この円滑な細胞分裂に役立っているのが「細胞分裂停止シグナル」を抑え込む「抑制フィードバック」である。

興味深いことに「細胞分裂停止シグナル」には「抑制フィードバック」が二つ備わっていることがわかり、これら二つの抑制機構は速さという観点では全く異なることがわかった。また、さらに、この二つの異なるフィードバック制御を持つというのは生物の進化のみならず、社会システム、宗教観に於いても我々の生活の営みとの共存という観点でも当てはまることが示唆された。本研究課題に於いては、それら社会におけるフィードバック制御と生命システムのもつフィードバック制御のアナロジーを紐解く。

１２、研究計画書　井上ウィマラ　（高野山大学）

全体計画：

　身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、人間関係における上下の力学が負の感情や暴力パターンの解消にどのような影響を与えるかという視点を中心にアプローチしてみたい。そのための基盤として、まずはマインドフルネス瞑想に関する総合的な経典である「念住経(Satipatthāna-sutta)」における五蓋と呼ばれる負の心理作用についての観察法と律蔵に記載された師弟関係における義務の特徴をまとめる。

次に、D.スターンの情動調律(affect attunment)やR.エムディの感情的応答性(Emotional availability)という概念を介して母子間の情動的な響き合いに際してどのような姿勢で臨むことが乳児の負の感情処理のための発達促進的環境としてふさわしいのかについてまとめる。また、こうした研究の先駆けとなったD.ウィニコットの「思遣りをもつ能力の発達」に基づいて乳児の攻撃性や罪悪感という原初的な不安がどのようにして思いやりに変容されるかについての考察をまとめ、その臨床的な応用例としてS.フライバーグの「赤ちゃん部屋のお化け(Ghosts in the nursery)」を取り上げて、多職種チームによるアウトリーチ型の母子支援について概観する。このようにして、適切な養育環境に出会うことができなかったために思いやりへと変容されることのなかった罪悪感がうつ状態や衝動的な暴力パターンを生み出す現状に対する具体的な対応法が明らかになろう。

さらに、A.ミンデルのランク(rank)という概念を援用して、上下関係という力の差を自覚的に使うことでお互いが楽になるような関係性や場の促進法についてまとめてみたい。

以上のようなアプローチの中で、母子関係から刑務所における矯正教育に及ぶ広範な領域において上下の力関係を自覚的な器として行使することによって、暴力的な負の感情パターンが解消されてゆく可能性について包括的なビジョンを提示することを目標とする。

２０１６年次計画：

　本年は、上座部仏教によって伝承されてきたパーリ経典における悪魔について取り上げてみたい。煩悩や死の象徴としての悪魔、霊的存在としての悪魔などを整理したうえで、ブッダと悪魔、仏弟子と悪魔との対話や交流を通して、戦う対象としてではなく、ありのままに見通すことによって「私のことを知り尽くしている(すっかり見通されてしまっている…)」という言葉を残して退散してゆくパターンを通して、仏教独特の悪魔の位置づけを明確化できるのではないかと思われる。

　その上で、東日本大震災発災直後に複雑性悲嘆やＰＴＳＤの専門家たちと立ち上げたJapan Disaster Grief Support プロジェクト（ＪＤＧＳ）の活動の中で、サイコロジカル・ファーストエイドなどを基に作成された「被災地の外部から被災者を支援する皆様へ」というチラシの中で「しないほうがよいこと」として紹介されている項目を取り上げて、善意からの行動によって相手を傷つけてしまう可能性がどのような力動によって発生するのかを考察することによって、霊的な暴力が発生する過程を推察してみたい。

　さらに余裕があれば、昨年度は取り上げることのできなかった、マインドフルネスによる医療者の燃えつき防止プログラムであるＧＲＡＣＥについて取り上げ、気づきがどのようにして共感疲労を防ぎ心の思いやりを可能にするかについても考察してみたい。

１３、「心理療法における身心の変容を引き起こす力とその感染力との関わりの研究」研究分担者：河合俊雄

　思春期に突然に統合失調症が発症したり、あるいは突然に膠原病などの自己免疫疾患に罹ったりするなど、心理療法で関わるクライエントは、まさに霊的暴力に直面しており、心理療法とは霊的な暴力の浄化に他ならないと言えよう。また暴力こそが人を変容させてくれるのも真実である。

　霊的暴力をコンテインして変容させるからこそ、それは心理療法の中で感染力をふるい、様々な影響を及ぼすことがある。症状がセラピストにうつることはまれでないし、セラピストが身体的な病気になることもある。また感染力はセラピストのみならず、クライエントの周囲の人間に及ぶ。さらには浄化するはずの心理療法が、霊的暴力をふるうことがある。それは本物の霊的暴力のこともあれば、治療関係によって形成されている、いわば偽の霊的暴力の場合もある。

　このような心理療法における心的な力との関わりの諸相を、心理療法の中から検討すると同時に、文学などにおけるパラレルな事象を取り上げて研究したい。

2016年度

　心理療法を受けにきたり、あるいはそこに連れてこられたりするクライエントにおいて、霊的暴力がどのような形で生じているのか、また家族などの周囲との関係でどのようにその脅威にさらされているのか、また避けているのかを分析したい。

さらには心理療法のプロセスの中で、霊的暴力がどのように変化し、それによってまたそれが家族などの周囲との関係で引き受けられ方がどのように変わっていくのかを検討したい。それにはクライエント個人の中で、身体的に生じていたものが心理的なものに変化していくこともある。またクライエントが言わば霊的暴力と取り組むことで、家族全体がよいように変化し、言わば家族内の霊的暴力が浄化されることがある。逆にクライエントがよくなることで、家族内、周囲で別の人が霊的暴力にさらされるようになることもある。

方法としては、河合および共同研究に参加してくれる田中康裕が、グループ・スーパーヴィジョンで聴く事例について、上記の視点から分析を加えてみたい。既に4月から研究はスタートしていて、最終的には約100事例を分析できるはずである。